

---

# サイダー

きみよし藪太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サイダー

### 【Zコード】

Z0818M

### 【作者名】

きみよし敷太

### 【あらすじ】

サイダーが世界で一番幸せな飲み物。

だけど奥さんがいるから別れると言つたあなたのせいで、わたしはサイダーが飲めなくなつてしまつた。

だつてそれは世界で一番幸せな飲み物だから。  
わたしは、サイダーを飲む権利を失つてしまつたといつことだから。

世界で一番幸せな飲み物はサイダーだ。その透明な液体の中に強く意志を持った炭酸がしゅわりしゅわりと浮かんでいるのを見るのが大好きなので、わたしは絶対にそれをコップに移してから飲む事にしている。サイダーという響きも可愛らしくて好きなのだ、頼りないような甘いような、男の子限定の思い出みたいな名前だから。けれども昔からその飲み物が好きだった訳ではない。

わたしの母は栄養士で、そしてどちらかというと頭が固い部類の人だった。だから、炭酸類は骨に悪いという事で一切飲ませてもらつた事がなかつたし、おやつだって忙しいだろうにけして市販のものを食べる事は許されず、いつでも母が作つたゼリーだのドーナツだのを食べていた。ジャンクフードなどもつての外で、わたしは高校生になるまでカップラーメンもハンバーガーも食べた事がなかつた。

その話をすると、いつでもあの人は可笑しそうに唇を横に持ち上げて、でも君は君のお母さん似なんだろうね、と言つた。

「じゃあサイダーはいつから飲み始めたの？」

「中学三年生の夏休み。今でも覚えてる、夏のプールの帰りよ。友達が奢つてくれたの自動販売機から、その時の興奮があなたに分かるはずないわ、禁断の飲み物を手にしてしまつたつて、わたししばらく動けなかつたのよ」

「大袈裟な。禁断の飲み物つて、未成年でも平氣で酒を飲むような時代に君は純情というかなんといふか、」

わたしをからかいたいあの人は、飽きずに何度もその話をさせたがつた。

彼が喜ぶのを知つていたので、わたしも拗ねた顔は作りつつも望まれるがままに繰り返した。

「チョコレートも駄目だったのよ、虫歯になるからつて。はつきり

覚えてる、お薬だよつてチョコレート貰つてたの。アーモンドの入つてるやつ。風邪引いたり、病気した時だけ、ひと粒貰えるの。わたしは中のアーモンドをチョコレートの種だと思っていて、植えれば好き放題チョコレートが食べられるんだって信じてた

今もその純情さのままで育つていれば良かつたのに、と彼が笑う。彼と最後の食事をしたのは、焼肉屋さんでだつた。わたし達は恋人同士で、いつか結婚するのだろうと思う程度には仲が良く、愛し合つていたのだけれど、彼にひとつだけ嘘があつたのだ。奥さんが居るという事。わたし達は恋人同士で、いつか結婚したいと真剣に望む程度にお互いを好いているのだと信じていたけれど、少なくともそれはわたしの方だけの愛情の測り方だつた。

カンパリオレンジを何杯も頼むわたしに、途中で彼が声をかけた。もうお酒は終わりだ、と。

「どうして？ カンパリオレンジを飲むのはわたしで、あなたじゃないのよ、わたしの心配をしてもいい権利はあなたにはもうないのよ？」

「どうしてそんな悲しい事を言つんだ」

奥さんの存在を内緒にしておいた事は悲しい事ではないのだろうか。わたしにとつても、奥さんにとつても、それは失礼な事だと言う事が彼には分からなかつたのだろうか。

「……そうね、でももうお酒はやめるわ、だつて今日はひとりで帰らなきゃいけないもの」

ちゃんと送つて、と言いかけた彼を遮り、わたしは店員に向つて叫ぶ。サイダーください、と。サイダーは世界で一番幸せな飲み物だ、少なくともわたしにとつては。悲しい時にこそ、幸せなもので中和しなくてはならない。そうしないと、わたしは泣いてしまう。

タン塩も骨付きカルビもハラミも、豚トロもホルモンもミノも、丁寧に焼いてすべて胃袋へ収める。食べ物に罪はないのだ、だからきちんと食べなくてはならない。そういう純粋さは貴重だけど痛いよ、と彼が小さく言った、けれどもわたしは無視させてもらつた。

奥さんが居たから別れる。わたしの決断はそれしかなかつた、誰かの不幸の上に恋愛が成り立つのだとしたら、少なくとも登場人物はすべて少しづつが傷付かないといけないと、そう思つていたから。

「タン塩、追加しても良い?」

運ばれてきたサイダーはジョッキに入つていた。大きな氷が溢れるほどで、カラリカラランと幸せな音を立てている。わたしは彼の返事も待たずに、タン塩を、と店員さんに告げる。

最後の食事だから、と必死になつて食べていた。今思えば、あの時わたしは彼を食べてしまったかったのだと知れる。彼の肉を食べてしまひたかつたのだ。わたしの物になるように。わたしの血や肉になるように。別れたくはなかつた、愛していたのは本当なのだ。いくら奥さんが居たとしても、わたしにとつてはその女性こそ後で出てきた第三者だつた。彼はビールを飲んでいた。あまりアルコールに強い人ではないのだ、だから日本酒が好きでもわたしと一緒に時は飲まなかつた。酔つてしまつるのは、わたしの役目だから。

「卑怯だけれど、君の事は本当に、」

「言わないでよ、口にすると嘘臭くなっちゃうから」

サイダーを飲みながらわたしはにっこりする。大丈夫、幸せな味、幸せな味、大丈夫わたしは泣かない。

サイダーを飲みながら、わたしは焼けた肉を端から摘む。これが彼だつたらよかつた、食べてしまひたかつた、体に悪いと知つても。

「ごめんね、わたしはジャンクフード、食べられないの。味は好きなの、食べたいとも思うの、だけど今でもお母さんの顔が思い浮かんじやつて駄目なの」

「俺は、君のジャンクフード?」

「さよなら、わたしは綺麗な人を食べて幸せに過ごすから泣かない、泣かない、泣かない、ただそれだけを頭の中で繰り返していた。好きな人と別れる時、それがどんなに正論であれ、自分が後々傷付かないためであれ、すべての言葉は無意味になる。自分

の欲しい答えを、本当は知っていた。嫌われたのでもなく、嫌いになつたのでもなく、それならば気付かなかつた振りをして付き合い続ければ良いのだと。

しかしそれはどう足搔いても出来なかつた。

わたしの頭の固さは、母親譲りなのだ、年季が入つてゐる。  
追加注文のタン塩を食べながら、わたしは目の前の男の人と今まさに別れてしまふのだと不思議な気持ちでいた。食べている間は同じ空間にいても、店の外に出てしまえばもう関係がなくなつてしまふのだ。思い出も記念も真っ白に失くなつてしまふ訳ではないけれど、それを見ないように生きていく事が必要とされるのだ。今、目の前で生きて動いて食べ物を口に運んでいる、この人は、わたしに関係のない人になつてしまふのだ。どんなにキスをしたからと、言い張つてももうそれは無意味なのだ。

「……ごちそうさま、」

散々食べ散らかした後で、少し決まりが悪くなつてわたしはそつとなく呟いた。これから別れる人の前で、こうも無防備に食事をしてしまつた自分に戸惑つてゐるのもあつた。

「ちょっと待つて、」

彼が丁寧な指先で店員を呼ぶ。あの爪の短く揃えられた、わたしをとんでもなく気持ち良くさせてしまつ指、かれの手をひたすらに愛していた事を思い出して、胸が哀しいほど痛んだ。

「もうさよならするなら、」

もう一杯分だけの時間を俺に頂戴、と。

サイダーを注文する。わたしのお腹はカンパリオレンジとサイダーとで、もういっぱいぱいだったのだけれど、それを静かに受け取る事が最大の愛の印になる気がして、わたしはひとつだけ頷いた。幸せな飲み物なのだ、サイダーは。本当は、別れ話の最中ではなく、楽しくて仕方がない野原へのデートなどで、乾いた喉にする通して笑いながら彼と飲みたかった飲み物。

あの最後の食事が、最後の彼のお願いが、わたしから幸せな飲み

物であるサイダーを取り上げてしまった。飲めなくなってしまったのだ、思い出してしまうから。彼の事を、彼といた日々がどんなに幸せだったかを、彼のすべてを。

「……いないと思つたらこんなところだ！」

後ろから声をかけられて驚く。夜中の自販機はぼんやり螢のようになつく灯る癖がある。

「なに、喉乾いてた？ 小銭持つてるけど？」

恋人はさつさと戻つて来て、ポケットの中に入つているらしいお金をちらりと鳴らす。わたしは思い出の中に居たままだったので、一瞬自分の居場所を失くしてしまい、ただ瞬きを繰り返すだけになつてしまつた。

「なんだよ、もう眠い？ おーい、頭ん中起きてますかー？」

「……あれ？」

「あれ、じゃないよ、もう帰つて風呂入つて寝るか」

くすくす笑う恋人は少年の面影が残つた横顔をしている。あの人、ではない、恋人。晚ご飯を食べた後、仕事で疲れている恋人を無理やり引つ張つて夜の散歩に出た事を思い出した。自販機の前で、ふと昔を思い出して動けなくなつていたのだ。

「あ、ねえ、」

ジュース欲しい、とわたしは恋人に告げる。

「何が欲しい？ 置つてやつたら素直に帰る？」

「うん帰る、お風呂上がりに飲むから、サイダー買つて？」

「サイダー？ お前炭酸飲んだっけ？」

飲むのよ、だつて幸せな飲み物ですもの、と言つたら恋人は不思議そうな顔をした。わたしは恋人の前で炭酸を飲んだ事がないのだ。だから、飲めないものとして捉えていたのだろう。

緑色の冷たい缶を取り出してもらい、渡される。家に帰るよ、の恋人の声はサイダーみたいに透き通つていて綺麗だ。だから、あなたつてサイダーみたいよ、と最上級の讃め言葉で言つてあげたのに、恋人にはちつとも伝わらなかつた。なんじゃそりや、と変な顔をし

ただけだつたけれど、わたしはそれでもなんとなく幸せになつてしまい、お風呂上がりのサイダーをこの人にふた口ぐらいお裾分けしてあげても良い、などとても太っ腹な事を思つてしたりした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0818m/>

---

サイダー

2010年10月8日14時38分発行